

大学生テニス経験者のプロテニス観戦に関する研究

The relationships between experiences and spectating - Focus on tennis players in college-

1K10C444-4 矢野 晋作

主査 原田宗彦 先生

副査 松岡宏高 先生

【序論】

現在国内で行われているプロテニスの国際的、あるいは大規模な大会は、ジャパンオープン、東レ・パン・パシフィック、全日本テニス選手権が代表的である。上記3大会の過去10年間の観客総数を比較すると、2003年の114,357人から2012年の164,351人へと、43.7%増加している。しかし、他種目と比較すると観戦者総数も少なく、今後の発展に期待できると考えられる。

また、佐野(2006)によると、テニス観戦者の特性として、リピーターが付きやすいこと、20代の観戦者が少ないことなどが挙げられる。このことから、10代、20代の観戦者の増加を試みるのが、今後のプロテニス観戦の発展に結びつくと考えられる。

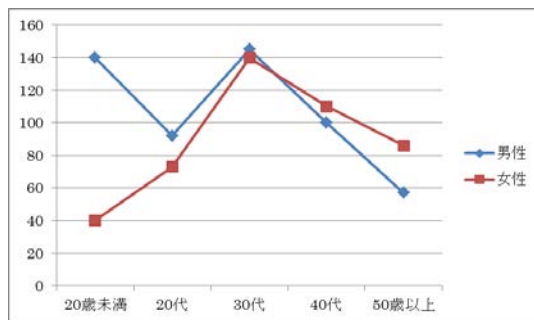


図1. テニス観戦者の性別と年齢

※佐野(2006)を元に筆者編集

【目的】

本研究は、テニス競技経験を有する学生のテニス競技への参加動機、テニス観戦動機を解明し、比較分析することで、今後のテニス観戦の発展のための基礎資料を作成することを目的とする。

【調査方法】

本研究では、早稲田大学の硬式テニス部、およびテニスサークルを対象に質問紙調査を行った。質問紙は、蔵本(2006)の大学内組織スポーツ参加動機測定尺度と松岡(2002)のスポーツ観戦動機測定尺度「SSMS」を参考に作成した。分析には AMOS18.0 および IBM SPSS Statistics20 を用いた。

【結果】

t 検定を用いて、運動部・サークルの所属別、競技年数別、テニスに関する年間消費金額などの差が学内組織スポーツ参加動機、スポーツ観戦動機に及ぼす影響をそれぞれ検証したところ、有意な因子は少なかった。しかし、優位であった因子が「自由」、「健康体力」、「固執」、「社会的有用性」、「達成」、「家族」、「エンタテインメント」の7因子に絞られていた。このことから、今後はこれらの因子に焦点を当てて深く研究していくことが重要ではないかと考えられる。

また、「競技志向の高さと観戦動機には相関がある」と仮説を設定し、相関分析を行った。まず、競技志向の強さを測定する因子として参加動機、上達、および技術向上の意志の強さを測る尺度の「達成」因子を選択した。次に、観戦意図を測定する因子として表1を参考に「達成」「知識」「競技レベル」を選択し、相関分析を行った。その結果、すべての因子間で相関が見られた。結果を表10に示す。この結果から、テニス組織に参加する動機として、「達成」因子が強ければ強いほど、テニス観戦において、知識を得ることやレベルの高いゲームを期待する傾向にあると言える。

次に、上記の検証とは逆に、「競技志向が低い人は、観戦にエンタテインメント性を求める」と仮定し、検証を行った。組織内でどの程度自由な雰囲気を求めるかを測定する尺度である「自由」因子と、観戦の楽しさを求めるかを測定する尺度である「エンタテインメント」因子間で同様に相関分析を行ったところ、1%水準で相関がみられた。この結果から、より練習の雰囲気や組織の風土として、自由さを求める人ほど、ゲームのエンタテインメント性を求めることが分かった。

【提言】

競技志向の高く、よりハイレベルな試合を求める観戦者を対象としたアプローチとして、会場に現在導入されているものよりも大型のビジョンを設置することでより選手のフォームを見ることができよう。また、競技志向の低い観戦者を対象にしたアプローチとしては、握手会などのイベントをさらに多く取り入れていくことにより、大会のエンタテインメント性を向上させることができると考えられる。